

第一回フランス語海外語学研修実施報告

冨田美有紀

キーワード：海外語学研修、フランス語、派遣

1. 派遣実施までの経緯

長崎大学で開講されている外国語を長期休暇中に海外の大学で学び、それを長崎大学の外国語の単位に読み替えるという海外語学研修が2006年から始まった。先に開始された三つの研修は全て協定校への派遣という形であった。先陣を切った中国語研修は協定校へ、次に行われた英語研修と韓国語研修は協定締結後に、それぞれ派遣を行ったのである。しかし、研修の形態は異なっている。中国語研修と英語研修は長崎大学の学生のためのクラスを開講するという形をとったが、韓国語研修は派遣先の大学ですでに開講されている夏季研修に、交換留学生として参加するという形をとった。

こうした流れを受けて、フランス語研修も海外語学研修について検討を始めた。フランス語担当教員が研修先を探し、研修の受け入れに興味を示したフランスの大学と協定締結と学生の夏季派遣についての話し合いを行った。しかし、先方ですでに開講されている夏季研修とは日程が合わなかったため、長崎大学の学生のためのクラスを開講してもらうことになった。授業料は一人当たりではなく、1クラスあたりで算出されたため、参加人数が少ない場合は、一人当たりの負担が増えることになる。それでも各委員会を経て了承されたため、実施することになった。参加者が20名程度いれば、他の研修ともあまり違いのない金額になるのだが、説明会を開いて参加者を募集したところ、12名しか集まらなかった。研修費用が高くなっても行きたいという学生もいたのだが、少数であったため、その大学への派遣をやめることにし、協定も結ばないことにした。

その後、ドイツ語研修が研修先となる大学と協定を結ばず、先方ですでに開講されている夏期研修に参加するという形での研修を検討し始めた。フラ

ンス語も履修している学生の現状から、ドイツ語研修と同様の形態で派遣するのが現実的であると考え、この形態での派遣について検討を始めた。その結果、フランスの大学で夏期講座を開講しており、授業時間数も他の研修と同程度で、長崎大学の夏季休暇中に派遣できるところとして、フランス西部にあるアンジェの西フランスカトリック大学が該当した。

派遣の際には授業内容などもさることながら、危機管理も重要である。中国、オーストラリア、韓国への派遣はいずれも教員が引率して行われてきた。しかし、フランス語の場合、協定校への派遣ではなく、また、何人行くか分からないことから、教員の引率はできない可能性が高い。そのため、現地でも危機管理を行ってくれる日仏文化協会を通じて派遣することにした。日仏文化協会にその旨を伝えたところ、快諾された。学生は日仏文化協会に研修の申し込みを行い、お金を振込む。長崎大学国際交流課には海外旅行保険への加入も確認できる研修申込書と保護者の同意が必要な誓約書を提出する。日仏文化協会には研修申込の事務的な手続きだけでなく、研修に申し込む前から研修についての相談や、飛行機の手配の依頼などもできる。また、研修先であるフランスにおいても、空港からアンジェへ行く電車まで、アンジェ駅から滞在先まで現地スタッフの引率がなされる。さらに、滞在先でのトラブル、病気、研修先での苦情にも24時間体制で対応してもらえる。このような充実したサポートが受けられるので、直接西フランスカトリック大学に申し込むよりも研修費用が高くなるが、その分、学生や保護者を安心させられると考えた。

こうして西フランスカトリック大学への派遣について研修内容の面からも危機管理の面からも問題がないと考え、各委員会にはかり、了承を得た。

海外語学研修は全て単位の読み替えが可能である。しかし、読み替えの方法は各言語によって異なる。フランス語の場合はフランス語Ⅲを履修中の学生（主に二年生前期）を対象としている。その学生が派遣先でプレースメントテストの結果、初級以上のクラスに配置され、最終評価で合格の判定を得た場合は、それがフランス語Ⅳの単位と読み替えられるということにした。判定はA～C（Dは不合格）で出してもらい、その判定をそのままフランス語Ⅳの評価とするのである。フランスの大学では、短期研修の成績は合否判定しか出さないのが一般的であるが、単位の読み替えのために合否判定に加えて評価が必要となるので、長崎大学の尺度で評価してもらえるよう、フラ

ンス語教員が評価用紙を作成した。学生は研修開始時にこの評価用紙を配属が決定したクラスの担当教員に渡し、研修終了時に記入してもらう。念のため、こちらからも大学宛に送付することにし、日仏文化協会にもその旨を伝えた。

2. 派遣決定後

2. 1. 派遣前説明会・オリエンテーション

4月末と5月初めの計二回、説明会を行った。説明会に来たのは六名であった。説明会では、研修の日程、費用、渡航ルート、危機管理といった事務的な部分を筆者が、フランスやアンジェの概要、研修の内容についてなどをフランス語教員が説明した。二度の説明会を行ったあとに、参加を表明したのは一名であった。そのため、研修への申し込み方法、渡航方法、単位の取得方法、トラブルの対処法、覚えておいたほうがいいフランス語の表現の提示といった詳しいオリエンテーションはフランス語教員の研究室で二度行った。オリエンテーション以外にも学生に疑問が生じたときに随時相談に応じられるよう、フランス語教員と筆者の研究室の場所とメールアドレスを教えておいた。

2. 2. 派遣先滞在中

研修期間は9月1日から9月26日であった。初日にはプレースメントが行われ、学生の能力に応じてクラスが配置される。ただし、ボーダーで上、あるいは下のクラスに配置された学生については、授業開始後すぐに下、あるいは上のクラスに行きたいと言えばクラスが変わることが可能であったようである。参加学生は一番下の入門クラスに配置され、授業内容は簡単だと思っていたが、クラスの雰囲気よかったので、上のクラスに入ることを申し出ずに、そのまま入門クラスで勉強した。

研修の内訳は、フランス語講座が52時間、会話が20時間、ラボが8時間、口頭理解が10時間であった。フランス語講座は教科書などを使ってフランス語を学ぶ授業、会話はフランス語講座で学んだ表現を使う状況を教師が設定し、その状況での会話を作って話す授業、ラボはコンピュータを使って、映像や音楽でフランス語を学ぶ授業、口頭理解はCDを使って機械的に練習する授業である。フランス語講座はフランス人教師が担当したが、会話や口頭理

解はフランス人の実習生が担当したため、授業によっては意図が分からないものもあったようである。フランスの大学ではそれが当たり前のようにであるが、日仏文化協会に問い合わせる必要はあろう。

1クラスは15名程度の編成で、会話とラボのときは1クラスをさらに半分に分けて授業を行ったため、クラスメートとは仲良くなったようである。特に日本人とは親しくなったと話していた。彼らは西フランスカトリック大学に留学する予定であったので、この夏季研修が終わっても帰国しないのであるが、見送りには全員が来てくれたようである。

授業のない土日有料で学校主催の見学旅行が行われた。オリエンテーションでフランス語教員が勧めたモンサンミッシェルとロワール城の古城めぐりには参加したそうである。どちらも普通の見学の場合は高いが、学生料金で行けるので、かなり安くなっている。また、どちらも旅行前に簡単な講義が行われ、当日は大学からバスで移動し、バス車内でもフランス語で説明がなされたので、研修の一環であると考えてもよいだろう。モンサンミッシェル見学には満足したようであるが、古城めぐりについては、一つの古城を見て、移動して、また別の古城を見るという形だったので、見学時間より移動時間が長く、疲れたようである。見学を面白いと思うか否かは学生の興味次第なので、渡航前のオリエンテーションで旅行の概要を説明してもいいだろう。

滞在はホームステイしか選べなかったが、ホームステイ先では快適に過ごせたようである。はじめは英語で意思疎通を図っていたが、だんだんフランス語を使えるようになったと言っていた。週末にドライブに連れて行ってくれたり、帰りは空港まで見送りに来てくれたりと親切にしてくれたようである。

食事については朝晩はホームステイ先で食べるが多かったが、昼は各自で食べるようになっていた。初めは学食に行っていたようだが、人が多く、それほど安くておいしいというわけでもなかったため、そのうちキャンパス外のレストランやカフェで食べるが多くなったらしい。他の日本人学生は、学食で食べるお金も授業料に入っているから、できるだけ学食で食べるようにと言われたそうである。しかし、学食を使わない学生もいる可能性が出てきたので、研修費用にどこまで含まれているのか再度問い合わせる必要がある。

2. 3. 派遣終了後

研修の概要について報告を受け、研修について、フランスについて等の感想を聞かせてもらった。また、フランス語を忘れないために、フランス人と交流したいということだったので、フランス人学生を一人紹介した。帰国後はフランス自体や語学、フランス人への興味が高まったようで、渡仏前より積極的に人と関わるようになったように思われる。

報告を受けた際、12月に来年度研修へ行く対象となる1年生向けに、研修報告会を行う旨を伝え、報告会で報告してほしいことなどを伝えた。この報告会は研修に参加した学生の成果を見るとともに、来年度研修に行きたい学生を一人でも増やすことを目的としている。報告会は夕方に行くとアルバイトなどで来られない学生もいると考え、昼休みに行うことにした。報告会の一週間前には最終の打ち合わせを行い、どういう方向で報告を行うか確認した。しかし、学生がインフルエンザにかかってしまったため、報告が行えなくなった。報告会を別の日に設定するのは、参加者に情報が行き渡らないので、報告会の日を変えずに、フランス語教員が写真をもらって報告した。報告会は研修に行った学生の写真で研修の概要を説明し、フランス語教員がフランスやアンジェについての情報を加えた。報告会は教室の半分が埋まるほど大勢の学生が聞きに来た。このことから、研修に興味を持っている学生はある程度いることがうかがえた。

3. 今後の派遣について

今回、説明会時には希望者が数名いたにもかかわらず、研修に参加した学生が一名であったのは、研修費用が高いことが一因であったと思われる。これは、フランス語教員が担当しているフランス語の授業で、費用が安いけれど設備が古いところと、費用が高いけれど設備がきれいなところとどちらがいいか、といった簡単なアンケートを行ったところ、設備が古くても費用が安ければ参加したい、という回答が多かったことからもうかがえる。そのため、研修終了後、別の研修先について検討した。その結果、日仏文化協会が仲介している研修のうち、国立大学であるブルゴーニュ大学が日程的にも内容的にも適当であろうという結論に至った。ブルゴーニュ大学での研修はホームステイだけでなく、学生寮も提供されるので、学生寮を選んだ場合は今回の研修より10万円強、ホームステイを選んでも10万円弱安くなることになる。

研修費用は安くなるが、日仏文化協会を通すので、同協会のサポートは受けられる。このブルゴーニュ大学への派遣について各委員会ではかり、了承が得られたので、2010年度からはブルゴーニュ大学へ派遣することになった。

また、今回の説明会は夕方に行ったが、アルバイト等があり、説明会に来た学生が少なかったことも、参加希望者が少なかった原因の一つであると考えられる。そのため、説明会も研修報告会と同様、昼休みの時間に行うことにした。

さらに研修費用が安くなるといっても、すぐに払える金額ではないため、早い段階で説明会を行い、お金と気持ちの準備をしてもらうことを考えた。昼休みに開催した研修報告会にはある程度の参加者がいたことから、研修説明会も昼休みに開催することにした。1月に研修の概要について簡単に説明する時間を昼休みに設けたところ、授業前であったこともあり、20名以上の学生が参加した。やはり、昼休みに開催するほうが、気軽に参加できるようである。予定研修費用、週末のオプション旅行、日仏文化協会の現地スタッフによる現地サポートなどを話したところ、興味を持った学生が数名いた。中には単位が必要でない学生も含まれている^りが、単位取得の有無に関わらず、研修に参加する学生が一名でも増えれば、三回目の派遣はさらに増えることが期待される。

さらに、フランス語教員の提案により、フランスに興味を持つ学生を対象に、フランス在住のフランス人とスカイプで会話する活動を行った。この活動により自分の習ったフランス語が何とか通じること、相手のフランス語がなんとか分かることを体験し、もっと使えるようになりたい、フランスへ行きたいと思ったようである。

4. 今後の予定と課題

2回目の派遣について5月中旬に詳しい説明会を行う予定であるが、それも、昼休みの時間に行った報告会・説明会の参加者が多かったという結果を踏まえて、昼休みに行うことにしている。この時間帯であれば夕方に説明会を開催するよりも多くの学生に参加してもらえないかと考えている。また、二年生は学部によって教養科目を履修する曜日が異なるため、キャンパスが違う学部に所属する学生は、説明会を行うキャンパスと同じキャンパスで開講されている教養科目を履修する日でない、興味があっても参加す

る学生が少なくなる可能性がある。そこで、説明会は火曜日と木曜日の二回行うことにした。多くの学生が聞いてくれば、参加したいと思う学生が増える可能性も高くなるであろう。

問題としては、8月～9月のヨーロッパ便は人気があるため、安い便ほど早く席がなくなってしまうことがあげられる。5月に行う説明会では興味がある学生は早い便を予約し、万が一研修に参加しない場合はキャンセル料が発生する前にキャンセルすればいいと説明することになっている。

この研修は、フランス語Ⅲを終えた学生が参加し、初級以上に配置され、そのクラスで合格した場合にフランス語Ⅳの単位に読み替えができる、という点が魅力の一つである。しかし、今回研修に参加した学生は、入門に配置された上に、研修終了後もフランス語を勉強したいということで、上のクラスへ行きたいと申し出ずにそのまま入門で勉強を行った。初級に配置されても合格しなければ単位にならず、合格しても、単位認定の申請をしなければ単位にはならない。また、単位が認定されても、勉強したい学生は勉強できる可能性がある。このことについて事前に詳しく説明しなかったため、今回の学生は簡単だと思ったにも関わらず下のクラスで勉強を続けることになってしまった。大学で学んだフランス語を生かすためにも、できるだけ初級に配置され、フランス語の能力を高めてほしいので、配置クラスや単位認定についてはさらに詳しく説明する必要がある。単位が認定されれば、単位認定に魅力を感じる学生の参加がさらに期待できるので、詳しく説明することにより、必要な学生は単位をとり、単位を出すプログラムであることを学生に分かってもらえるようにしていきたい。

また、フランス語担当教員、国際交流課、留学生センター教員の連携のあり方をさらに考えていく必要がある。留学生センター教員である筆者は日本人学生との接点がないため、日本人学生との接触が難しく、情報が届きにくい。逆に、日本人学生にとっても筆者は遠い存在で、何事もまずフランス語担当教員に話す、という形になっていた。しかし、フランス語担当教員はフランスや研修についてはよく分かるが、事務的な手続きについては分からない部分もある。事務は研修内容などについての質問には答えられないこともある。結果的に、一人の学生がこの三種類の人と順番に接触をはかり、必要な情報を得ていかなければならないので、この三者が連携し、学生がほしい情報が、誰と接触しても分かるという状態にすれば、行きたい気持ちになっ

て訪れた学生の意欲をそぐことがなくなるのではないだろうか。

5. おわりに

どの大学でも長期・短期の留学が行われるようになってきており、留学経験があることは珍しくなくなった。樋口（2009）でも企業では留学経験者を採用において特別扱いせず、留学中に身につけた能力・適性を評価すると報告している。評価する能力は語学能力や学位ではなく、主体性・実行力や異文化理解、論理的思考能力などの汎用的能力ということである。こうした汎用的能力は留学形態の違いに関わらず、大半の留学経験者が感じているものだと分かっているので、四週間という短い期間でも海外で勉強したという経験が汎用的能力を高めるのに役立つと思われる。費用が高いため、強くすすめるのは難しいが、行く価値は十分にある。その価値を渡仏前にどれだけ伝えられるか、金銭面の心配をいかに早い段階で解決してもらえるかが今後の研修希望の学生数に影響を及ぼすであろう。

また、今回は問題がなかったが、危機管理のために情報を得る手段を考えていかねばならないと思った。何か問題があれば日仏文化協会から連絡が来ることはなっていたが、プレースメントテストの結果がどうであったか、ホームステイ先では快適に過ごしているか、など、問題がないことも確認できたほうがよかったように思う。特に今回はプレースメントテストの結果から本人が判断して入門クラスにとどまったが、適切な情報があれば、もしかしたら初級クラスに行き、フランス語の能力もさらに上がっていたかもしれない。問題があってもなくても連絡することを義務付ければ、学生に適切な情報を与えることができると思われる。コンピュータや携帯を持っていなかったのも、そうした機器がない学生との連絡の取り方を、渡航前のオリエンテーションで周知させる必要があるだろう。そのために、研修の説明会や渡航前のオリエンテーションで知らせておくべき項目を再度吟味していかなければならない。また、帰国後も研修の報告や単位の取得手続きなどが必要なので、帰国後の集まりもどのようにするか考えて行く必要がある。

長崎大学留学生センターではさまざまなプログラムが実施されているが、日本人学生を派遣するプログラムは、この海外短期語学研修だけである。しかし、英語研修は初回から定員を満了す参加、中国語研修は回を重ねるごとに参加者が増加、韓国語研修も回を重ねるごとに希望者が増加と、着実に成

果を上げてきている。フランス語研修も先行する研修と同様、回を重ねるごとに参加者を増やし、研修に行った学生からの評判を聞いて、さらに希望者が増える、という流れになっていけばと思う。そのためにも事前、事後のオリエンテーションを充実させ、研修中の危機管理をさらに強固なものにしていかなければならない。

注

1) 学部によっては、フランス語Ⅱまでしか必修にしていないところもあるため。

参考文献

- 斉藤百合子 2009 「海外体験学習プログラムの危機管理」 『留学交流』
2009年5月号 pp.10-13
- 永井智香子・村瀬隆彦 2006 「長崎大学における大学間交流の新しい取り組み」 『留学交流』2006年12月号 pp.10-13
- 永井智香子 2007 「第1回中国語海外短期語学研修実施報告—参加学生が書いたアンケートとレポートを中心に—」 『長崎大学留学生センター紀要』
第15号 pp.17-27
- 樋口健 2009 「留学で何を身につけるのか」 『留学交流』2009年7月号
pp.22-15
- 松村真樹 2007 「第1回オーストラリア短期英語研修：単位認定と海外体験学習の両立を目指して」 『長崎大学留学生センター紀要』第15号 pp.1-16
- 松本久美子 2008 「学生交流と大学の国際化—海外短期語学留学プログラム『第1回韓国語研修』を一例として—」 『長崎大学留学生センター紀要』
第16号 pp.97-110

謝辞

フランス語研修実施にあたっては、研修先の検討や該当学生への周知などで大学教育センターのモレ先生と大橋先生に、事務手続きなどでは国際交流課の中尾さんと宮地さんにお世話になりました。また、研修方法などについて留学生センター嶋津先生と経済学部仲井先生から助言をいただきました。ここに記して感謝します。

(留学生センター講師)